



Title	インド東部チョターナーグプル地方における言語輻合について
Author(s)	長田, 俊樹
Citation	神戸市外国語大学外国学研究. 1991, 23, p. 143-177
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/18446
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

インド東部チョターナーグプル地方 における言語幅合について*

長田俊樹

I. 序論

インドのビハール州南部を中心として、マディヤ=プラデシュ州北東部、オリッサ州北部、そして西ベンガル州南西部にまたがって拡がるチョターナーグプル高原は、インド=アーリア語族とドラヴィダ語族、そしてムンダ語族に属する諸言語が共存する地域であり、これら南アジアの三語族が言語圏(linguistic area)を形成していることは、よく知られている。言語圏研究の父(Masica. 1976: xi)と呼ばれるEmeneauは、言語圏を次のように定義づけている。

'an area which includes languages belong to more than one family but showing traits in common which are found not to belong to the other members of (at least) one of the families'

(Emeneau; 1956. 論文集 1980^a の P. 124)

チョターナーグプル地方は典型的な言語圏であり、インド=アーリア語族に属する、ナグプリ語(Nāgpurī 又は Nāgpuriyā), クルマリ語(Kurmāli), ヨルタ語(Khorṭhā), パンチバルガニア語(Panchparganiyā), ドラヴィダ

* 小論はUppal Publisher(インド・デリー)から出版された論文集「チョターナーグプル地方の文化：多様性と統一」('Cultural Chotanagpur: Unity and Diversity' 1991年1月刊行)に掲載された 'Notes on linguistic convergence in the Chotanagpur area'に基づいて筆者が日本語に書き改めたものである。日本語に書き改めるにあたっては、大幅に加筆修正が施された。なお英文原稿については、シカゴ大学のノーマン=ザイデ教授の御教示を仰いだが、言うまでもなく文責は全て筆者にある。ここでザイテ教授の適切で丁寧な御指導に対して、感謝の意を表わしたい。

(1) ここで挙げた四つのインド=アーリア諸語には、母音の長短の対立がない。ローマ字表記上、āとaの区別を示したが、それぞれ /a/ と /ʌ/ 又は /ɔ/ を表わす。したがってカタカナ表記の際、ナーグブリー等とはしなかった。

語族のクルク（オラオン）語 (*Kuruk*) とマルト語 (*Malto*), そしてムンダ語族のサンタル語 (*Santali*), ムンダ語 (*Mundari*), ホー語 (*Ho*), カリア語 (*Kharia*) などが話されており, 長い歴史的な接触の結果, これらの諸言語の間には語族を越えて類似点がみられるようになった。小論では, この共通の言語特徴のいくつかを Emeneau らの研究に照しながら, 検証し, 例示することを目的とする。

これまで, 何人かの研究者が南アジアの地域特徴を提示してきた. (Masica, 1976: Appendix-A Inventory of Proposed Indian Areal Features を参照) そこで, まず最初に, これらの研究者がすでに論議してきた地域特徴——つまり (1) Echo-word Formation (2) Onomatopoetics (3) 類別詞 (4) 指示詞幹一について, チョターナーグプル地方の諸言語から例を挙げて論じる。次に, 今回ここではじめて取り上げる特徴——(5)存在を表わす copula (「いる」, 「ある」) と身分や属性を表わす copula (「です」) の区別一について詳しく例文をあげながら, 検証する。ここで扱われるデータは, 基本的に共時的な記述資料に基づくものであるが, すでに何人かの研究者が提示している歴的解釈についても, 必要に応じて示しておく。また, ここで問題とするのは, 主に, チョターナーグプル地方の諸言語に限られる。我々のデータには限りがあるので, (3) ナグプリ語以外のサダン語語と(4)以外ではマルト語について考慮しない。

(2) ムンダ語族の *Santali*, *Mundari*, *Ho* のカタカナ表記について, 一言述べておく。*Santali* と *Mundari* について, 部族名としては, それぞれ *Santal*, *Munda* があるので, サンタル語, ムンダ語とした。語族としての *Munda* と一部族である *Mundā* の人々が話す言語とを区別して, 英語では, 前者に *Munda* を, 後者の個別言語に *Mundari* を当てている。インドの学者の中には, これを混同している人も多い。古くから, この混同を指摘する人がいて, 日本語の翻訳がある「言語学史」を書いたトムゼンもこの混同を取り上げ, 言語グループとしては, *Kherwarian* を使用することを提案している。日本語表記では, 個別言語名も言語グループ名もムンダとし, 諸語やグループ等をつけ加えて個別言語名と区別する。

また, Grierson の Linguistic Survey of India にならって, *Mundā*, *Mundāri* から, ムンダー, ムンダーリーと表記する人もいるが, ムンダ語で「村の長」を意味する *munḍa* は, 決して a を伸ばして発音されることはない。

*Ho*については, 単一開音節では, つねにニモーラで発音されるので「ホー」とした。なお, *ho* は「人」を意味し, ムンダ語の *horō* 「人」と対応し, ホー語では, 歴史的にみて, 母音間の ŋ が全ておちている。

(3) Nagpuri の名称について, *Sadani*, *Sadri* も同じ個別言語名に使用されるが, B. P. Kesari /

Ⅱ. チョターナーグプル地方の諸言語に共通する地域特徴

(1) Echo-word Formation

Echo word が、言語学の術語として、どう定義づけられているのかについては、はっきり定まっているわけではない。例えば、Morin (1972) は、フランス語の echo-words についての論文の中で、echo words を単に ‘reduplicated words or reduplicated roots’ (P. 97) とだけ説明しているにすぎない。これに対し、reduplicated words と同義語としての Echo words という使われ方は、インドの諸言語を考える時にはあまりみられず、Chatterji (1926) は次のように定義づけている。

‘A word is repeated partially (partially in the sense that a new syllable, the nature of which is generally fixed, is substituted for the initial one of the word in question, and the new word so formed, unmeaning by itself, echoes the sense and sound of the original word), and in this way the idea of *et cetera* and things similar to and *associated with that*, is expressed’ (P. 176)

Chatterji の定義をもう少し具体的に、意味よりも構成に重点がおかれた、Emeneau (1956) の次のような定義をここでは採用する。

‘basic word formulated as CVX is followed by an echo-word in which CV is replaced by a morpheme *gi-* or *u-* or the like (or C is replaced by *m-* or the like), and X echoes the X (or VX echoes the VX) of the basic word. The meaning of the echo word is “and the like”;’ (P. 114 Emeneau 1980 による)

これまで、チョターナーグプル地方で話される以外のインド=アーリア諸語やドラヴィダ諸語及びムンダ諸語に関しては、この echo word の研究が発表

↗(1988, personal communication) によると、古くからチョターナーグプル地方に部族民と共に存してきた人々を Sadan と呼ぶことから、Sadan たちの母語である Nagpuri, Kurmali, Khortha, Panchparganiya の4言語の総称を Sadani と定めるべきだと提案しており、筆者はそれを採用した。

されてきた。例えば、総論として、Bloch (1934), Emeneau (1980), ヒンディー (Hindi) 語については、Singh (1968), Abbi (1980), マラーティー語 (Marathi) については、Apte (1968), ベンガル語 (Bengali) については、Dimock (1957), デシア語 (Desia) (オリアーラー語の一方言) については、K. Mahapatra (1986: pp. 286-288). ドラヴィダ諸語では、テルグ語 (Telugu) については、Bhaskasarao (1977), トダ語 (Toda) については、Emeneau (1938) 等がある。ムンダ諸語では、グタ語 (南ムンダ諸語) (Gta?) については K. Mahapartra (1976) と N. Zide (1976), ソーラー語 (So: ra:) については Ramamurti (1931, 1933, 1938) と Vitebsky (1978) 等がある。

そこで、チョターナーグプル地方の諸言語に共通する echo word を Monika Jordan=Horstmann (1974) の資料を使って、例示してみよう。それぞれ三つの語族に属する諸言語にみられる echo word の類似性を強調するために、この資料以外にも、別の資料や筆者自身のフィールドノートを使って、次のような表にまとめた。(表 1) なお、Jordan=Horstmann の Sadani は、小論の Nagpuri と同じである。Nagpuri は Jordan=Horstmann (1974) から、それ以外については、すべて出典を示しておいた。

〔表 1〕

- (a) Na. *jhaka-maka-* 'shine, shining' **jhakk-* 'flash, shine' CDIAL 5071,
-*maka-* :echo form
Mu. EM 2040 *jhaka-maka* 'shining with gold, silver or tinsel'
Sa. SD III-363 *jhak mak*, *jhak makao* 'polish, burnish, trim, clean'
SD III-362 *jhak jhak* 'shining, bright, glittering, glistening'
c. f. Kuiper (1965: A-59)
Kh. (FN) *jhaka maka* 'shining'
Kur. EUD *jhakmakrnā* 'shine' *jhakā makā* 'shining'
(b) Na. *jhili-mili* 'glitter, shine' **jhil-* 'flash' CDIAL 5391, mili :

echo form

Mu. EM 2063 *jili-mili* 'rippling and glittering water'

Sa. SD III-392 *jhil mil* 'glossy, showy, shining, resplendent, decked out'

Ho HED 165 *jili-mili, jil-mil* 'to sparkle'

Kh. (B) *jilmile* 'glitter'

Kur. EUD *jhilmilrnā* 'glisten'

- (c) Na. *ringi-cingi* 'colourful'

Mu. *ringi-chingi* 'colourful' (Bhaduri 1931)

EM 3589 *rigi migi* 'a cloth varigated with parallel lines or squashes of various colour'

Sa. SD V-91 *ringic' cingic'*, V-92 *ringi tingi* 'eager,fervant, delighted'

Kh. (FN) *ringi cingi* 'multi-colour'

Kur. *r̩igi-c̩igi* 'colourful' (Grignart)

- (b) Na. *sigil-bigil* 'groaning, moaning'

Mu. EM 3955 *sigil-bigil, sigid-bigid* 'a number of men or animals (especially fish), moving about confusedly'

Sa. SD V-268 *sigic' bigic'*, V-269 *sigir bigir* 'in confusion, disordered'

Kh. (FN) *sugul bugul* 'confuse'

Kur. (J-H) *singilmingilrnā* 'to make about rapidly'

- (e) Na. *kaba-kubu* 'bent, stooping' c. f. CDIAL 3301

Mu. EM 2159 *kaba-kobo, kaba-kubu, kabač-kubui, kabaj-kubun, kabāra-kubūru, kiba-kabi* 'an accidental crookedness of the back, caused by pain owing to which one walks stooping but straightening oneself now and again'

Sa. SD III-410 *kabac' kubuc'* 'stooping, shufflingly (walk)' *kaba kobo*
'bent, stooping'

Ho HED 175 *kaba-kubu* 'to be bent over because of some weakness
or sickness in the waist etc.'

Kh. (FN) *kabar kubur, kapa kupu* 'bent, stooping'

Kur. EUD *kabākub'urnā, kabarkuburrnā* 'stoop' c. f. DED 1131

(f) Na. *hilo-dolo* 'shaking' c. f. CDIAL 14120

Mu. EM 1702 *helo-delō, hila-dolo* 'jolting or shaking to and fro'

Sa. SD III-116 *hilo dolo, hilo dolō, hilo dholo* 'swayingly, waddling
(walk, fat people)'

Kh. (FN) *hilo delo* 'shaking'

Kur. (J-H) *hilo dolo* 'shaking'

(g) Na. *chiri-piti* 'condition of being making a line (by children) for
playing or doing something, of being scattering
flowers' (FN)

Mu. EM 836 *chitir-bitir, citi-bitī, chiti-bitī, citir-bitir* 'dispersion, the
condition being scattered about'

Sa. SD I-548 *ciri biri, ciri biti* 'into small pieces, thinly, sparsely,
scattered'

Ho. HED 66 *chitir-bitir* 'to scatter'

Kh. (FN) *citi pitī* 'scattered'

Kur. *chiri pitī* 'dispersed' (Grinard)

出典 [source] については表 2 に載せた。

(2) Onomatopoetics

Echo words と Onomatopoetics は、混同されることがしばしばあり、最近インドで出版された辞典によると、Echo words は Onomatopoeic words

に含まれると解釈されている。⁽⁴⁾ これは echo words の定義が定っていないことによる混同であり、Emeneau の定義に従がうことで、こうした混同は避けられるように思われる。つまり、Echo word は、Emeneau (1956) の定義した語形をもち、擬態や擬声を表わすのではなく、「～と～に類するもの」を意味するのである。

一方、擬声語や擬態語について、Onomatopoetics 以外にも、これまで種々の術語が使われてきた。例えば、imitatives, onomatopes, chameleons, phonetic symbolism, phonaesthemes or phonaesthetic forms (Emeneau 1980a P. 7) こうした術語に対して、Emeneau (1980^a) は、Diffloth (1976: 263-264) に従がって、もっとも抱括的な術語として ‘expressive’ をこれから使用したい (P. 7) と述べている。そして、さらに、その下位範疇として、⁽⁵⁾ symbolism が音韻的である場合は、ideophones を用い、onomatopoetics は、symbolic が音響的 (つまり、音の模倣) である場合の ideophones に使うことを提案している (P. 7)。しかし、小論では、Emeneau の新提案は採用せず、Onomatopoetics を音の模倣ばかりでなく、広く擬態語を含めた、Emeneau (1969) に沿った形で論を進めたい。

Emeneau (1969) は、インド=アーリア語族とドラヴィダ語族に共通にみられる Onomatopoetics を研究し、‘Onomatopoetic areal etymologies found in Dravidian and Indo-Aryan’ をまとめあげた。そこで筆者は、チョターナークル地方の諸言語に共通してみられる Onomatopoetics を、この Emeneau の表から抜き出して、Emeneau が記述しなかったムンダ諸語や Nagpuri のデータを追加して、以下の表にまとめた。(表2)

(4) Harder Bahri ‘Definitional Dictionary of Linguistic Terms’ (1985) によると、echo words は ‘Onomatopoeic words formed by repetition or close imitation of a sound or sounds’ とある。インドでは、言語学の水準は決して高いと言えず、この辞典は、はからずも水準の低さを露呈するものとなった。

(5) 例えば、Bernard Comrie が中心となって作った Lingua Descriptive Studies: Questionnaire (Lingua 42, pp. 1-72, 1977) では Onomatopes 等の術語ではなく、この Ideophones が使用されている。

[表2]

- [1] DED 930a Kur. *kharar-kharar* 'sound of articles loosely packed and playing against one another (the creaking of a cart etc.) *kharar-kharararnā* 'to rattle loosely together'
- Na. ESD *gargarāek* 'to gurgle' c. f. CDIAL 3972
- Mu. EM 1329 *gara-gara*, *gara-garal* 'the soud of gargling'
- Sa. SD II-391 *gar gar* 'gurgling, rumbling'
- Ho HED 108 *gara-guru* 'a rumbling sound of thunder'
- Kh. (B) *gargaray* 'gargle'
- [2] Kur. EUD *kaṭar-kuturraā mōkhnā* 'crunch' c. f. DED 930b
- Na. ESD *khat khut* 'make noise while chewing' c. f. CDIAL 3771
kit kit 'gnash the teeth' c. f. CDIAL 3154
- Mu. EM 2256 *kaṭa-kuṭu* 'the moderate sound of persistant crunching of small brass'
- EM 2258 *katar katar* 'crunching, gnawing'
kaṭar kuṭur 'the moderate sound of crunching small brass, other small hard things'
- Sa. SD III-474 *kaṭar kutur* 'crunching'
- SD III-678 *khaṭar khaṭar*, *khaṭar khuṭur* 'nibbling, gnowing, crunching, cracking'
- [9] DED 1382 Kur. *gurgururnā*, *gurguramba'anā* 'to make a succession of abrupt noises rapidly repeated (e. g. thunder, handmill, hookah, a short re-echoing among hills)
- Na. (FN) *gurgurāek* 'to rumble a thunder, to growl a stomach'
c. f. CDIAL 4180
- Mu. EM 1540 *guru-guru* 'it refers to not very near thunder'
EM 1393 *gara-guru*, *gara-giri*, *gar-gir*, *gar-gur* 'the rolling

of pretty near thunder'

Sa. SD II-504 *gur gur* 'rolling, rumbling' *gurgurəu* 'roll, rumble'

Ho HED 123 *guru-gura* 'making a loud rumbling noise'

[12] Kur. EUD *gurgurrnā* 'growl' c. f. DED 1538

Na. ESD *gurgurāek* 'to purr (of cat)' c. f. CDIAL 4207

Mu. EM 1388 *gargor* 'the purring of cats'

Kh. (FN) *gur-gur* 'purring of cat'

[16] Na. (FN) *sarsar* 'noise of a snake crawling, rustling sound made by a wind'

Mu. EM 3857 *sar-sar* '(1) of grains, of sand, or of slanting rain, hitting leaves, especially dry leaves. (2) of a top, or potter's wheel touching dry leaves whilst spinning'

Sa. SD V-203 *sar sar* 'to make a bubbling, lapping, splashing sound'
sarsaraō 'to make a rustling sound'

c. f. Kur. EUD *sarsarrnā* 'rustle' *sarsarrnā* (FN) 'fell out of sorts'

[32] Kur. EUD *burburi*, *burburrnā* 'to bubble, bubbling' c. f. DED 3490

Na. (FN) *burburāek* 'to bubble (water)' c. f. CDIAL 9278

Mu. EM 671 *burui-buruč*, *buduč-buduč* 'the bubbling of water especially previous to boiling point'

Sa. SD I-350 *buduc*' *buduc* 'equal to *bidic*' *bidic*'

SD I-283 *bidic*' *bidic* 'bubbling' c. f. Kuiper (1965: A-1)

Ho HED 49 *bur buri*: 'bubbles'

Kh. (FN) *bur bur* 'bubbling'

[39] DED 4276 Kur. *barbarrnā* 'to talk loudly, chatter noisily'

Na. ESD *barbarāek* 'chatter' *bharbharāek* 'chatter loudly'

c. f. CDIAL 9122

- Mu. EM 408 *bara-barā* 'very fast speaking'
- Sa. SD I-389 *bhar bhar* 'incessantly, continually, freely, openly, fluently, flowingly'
- bhar bharaō* 'speak, fall down (rain) incessantly, continually'
- [40] Kur. EUD *garbar* 'disorderly' c. f. DED 939
- Na. ESD *garbarāek* 'be confused' c. f. CDIAL 3974
- Mu. EM 1396 *garbar, garabara, garbaraō* 'departure or disturbance from the riguht, regular or customary order'
- Sa. SD II-360 *gad bad* 'confusion, disorder'
- gadbadao* 'put into disorder or confusion'
- c. f. Kuiper (1965 : C-39)
- [46] DEN S²70 Kur. *musmusurnā* 'to smile', *muskārnā* 'to smile'
- Na. ESD *muskurāek, musmusāek* 'to smile' c. f. CDIAL 10227
- Mu. EM 2850 *musu᷑-musu᷑, mogo᷑-mogo᷑, mergo᷑-mergo᷑, merlon-*
merlon, miru᷑-mirlu᷑, mo᷑-mo᷑, mugui᷑-mugui᷑
'i a smile, the act of smiling'

[Sources]

Kuṛux DED=A Dravidian Etymological Dictionary.
(Kur.)

DEN=Dravidian Etymological Notes.

EUD=An English-Uraon Dictionary.

Nagpuri ESD=English-Sadri Dictionary.
(Na.)

Mundari EM=Encyclopaedia Mundarica. Vols. I-XIII.
(Mu.)

Santali SD=A Santali Dictionary. Vols. I-V.
(Sa.)

Ho HED=Ho-English Dictionary.

Kharia (B)=H. S. Biligiri (1965)
(Kh.)

[Abbreviation]

CDIAL=A Comparative Dictionary of the Indo-Aryan Languages.

FN=My own Field Notes.

[Orthography]

Kur. '=[?], Mu. Vowel + .=[?], Ho : =[?]

Mu. b, d + . and Sa. p', t', c', k' denote so-called 'checked consonants': phonetically devoicing pre-glottalization [?b], [?d] and [?p], [?t], [?c], [?k] respectively.

Mu. Vowel + ^ = the short vowel which can be omitted in a quick speech.

(3) 類別詞

我々、日本語を母語とする者にとっては、類別詞は特別珍しいものではない。我々はものを数える際には、数えるものの種類によって、類別詞を使いわけている。例えば、本は1冊、鉛筆は1本、紙は1枚といった具合で、これら冊、本、枚を、類別詞と呼ぶのである。

この類別詞は、日本語のように豊富ではないが、チヨターナーグプル地方の全ての言語にみられる。そこで、各々の言語の類別詞をこれまでの研究者の記述にしたがって提示し、最後に、この地域の類別詞の起源について Emeneau の説を紹介する。

Nowrangi (1956) は、Nagpuri の類別詞を次のように記述している。類別詞として *go*, *got*, *gor*, *tho* 等があり、これら類別詞を含んだ例文をあげると、*mor ekego ghora rahe* (*mor* 「私の」 *ek* 又は *eke* 「①」, *go* 「類別詞」, *ghora* 「馬」, *rahe* 「居る」) 「私のところには、一頭の馬がいる。」, *mor gotek ghora*

rahe 「私のところには、一頭の馬がいる」 また、 *mūr* 「頭」は家畜を数える時に、 *khāra* 「枚、個」は布等を数える時にそれぞれ用いられる。例えば、 *pāc mūrgaru* (*pāc* 「5」 *garu* 「家畜」) 「5頭の家畜」、 *pāc khāra luga* (*luga* 「布」) 「5枚の布」。形態素の順序は、主に、数詞+類別詞+名詞であるが、*got-ek* の場合には類別詞が数詞の前にあらわれている。

Emeneau (1956) は Kuṛux の類別詞について次のように述べている。(Emeneau 1980^a の P. 116) Kuṛux の体系は、 Magadhan 諸語の体系とよく似ており、類別詞の多くは、隣接する Magadhan 諸語、つまり Bihari や Oriya からの借用語である。例えば *jhan*, *gotangi*, *thur* [c. f. Bengali-*tu*]、これら類別詞は、インドはアーリア諸語から借用した数詞とともに用いられるばかりでなく、個有の数詞（2から4）とともに、使用される。

次にムンダ諸語についてみてみよう。まず、 Santali では *hor* 「人」、*orak'* (元の意味は「家」) 又は *gharɔñj* 「家族」、*sərim* (元の意味は「屋根」) 「軒」 *bɔhɔk'* 「頭」が類別詞として使われるが、これらは、いずれも個有語である。(Bodding 1929: 60)

Mundari と Ho も Santali と同様の類別詞がみられる。*horo* 「人」、*ora?* 「軒」、*boo?* 「頭」が Mundari では類別詞として用いられる。例えば、*api horo hon-ko* (*api* 「3」, *horo* 「人：類別詞」, *hon* 「子」, *-ko* : 複数接辞) 「3人の子供たち」(Hoffmann 1903: 65) Ho では、*oa?*、*ho*、*boo?* がそれぞれ家、人、家畜を数える時に用いられる。(Deeney 1975: 101) また、筆者自身の観察によると、インド=アーリア諸語からの借用語である *jon/jan* が Mundari, Ho で人を数える際にしばしば使用されるが、この *jon/jan* はいつもインド=アーリア語の数詞（個有の数詞と並行してインド=アーリア諸語の数詞がひんぱんに使われている）と共にのみみられる。例えば、*tin jon/jan*、*hon-ko* (*tin* 「3」) 「3人の子供たち」。しかし、**tin horo hon-ko* や **api jon/jan hon-ko* はふつうみられない。

Malhotra (1982) は、 Kharia の類別詞について、次のように記述してい

る。 *jhan* (IA [インド=アーリアン] *jan, jan*) は人間を表わす名詞と共に使われる類別詞である。また *ge* はインド=アーリア諸語の数詞とともに用いられるが、*thon* は、Kharja 個有の数詞 *ubar* 「2」とともに用いられる。*tin jhan lebu-ki* (*lebu*「人間」-*ki*: 複数接辞) 「3人の人間」 *tin-go kunru* (*go*: 類別詞, *kunru*「子」) 「3人の子供たち」, *hokra?* *ubar-thon* *kunru aij-kiyar* (*hokra?*「彼の」, *ubar*「2」, *thon*: 類別詞, *aij*「いる」, *kiyar*: 双数接辞) 「彼には二人の子供がいる」

以上みてきたように、ムンダ諸語の形態素の語順は数詞+類別詞+名詞である。

史的解釈については、Emeneau (1956) の次のような指摘を引用するにとどめておく。

'My reconstruction, relying on the fact that some, if not only, Indo-Aryan classifier morphemes are used in all the languages involved and on the further fact that these morphemes are used only with Indo-Aryan numerals in some of the non Indo-Aryan languages, is that the construction (so far as India is concerned) is originally Indo-Aryan' (Emeneau 1980^a の P. 118)

なお、類別詞の使用は、日本語や中国語をはじめ、南アジアを越えて、東南アジアから東アジアにかけて、かなり広範囲にみられ、Masica (1976) は、インドの地域特徴とは認めていない。(Masica: 1976 Appendix A 参照)

(4) 指示詞幹 (Demonstrative Base)

ここまでみてきた地域特徴は、すでに Bloch (1934) や Emeneau (1956) が指摘した、言わば「古典的」な特徴に類するが、最近、問題となっている指示詞幹について、ここでは取り上げてみたい。

まず最初に、通時の考察に入る前に、それぞれ個別言語の指示詞を少し詳しく述べ、借用関係等、史的問題については、今までの研究者の説を紹介しながらみていくことにする。

Nagpuri の指示体系は、近称 *i*, 遠称 *u* の二体系である。 (Monika Jordan-Horstmann 1968: 66–7 Nawrangi 1956: 37) これらは、指示代名詞として「これ」「それ」を表わすほかに人称代名詞として、「彼、彼女、それ」をも表わす。また、指示形容詞として（「この」、「その」）そのまま名詞を修飾する。ここで注目すべき点は、指示詞幹 *i*, *u* から派生される *ihā*「ここ」, *uhā*「そこ」の交替形として、*hiyā*「ここ」, *huā*「そこ」という *h-* を含む語形がみられることである。*h-* を含んだ語形としては、*hine*, *hinde*「こちらへ」, *hune*, *hunde*「そちらへ」がある。

Kuṛux の指示体系は、近称 *i*, 中称 *hu*, 遠称 *a* の三体系で、これらは指示形容詞「これ」「それ」「あれ」を意味する。指示代名詞は男性名詞では *is*, *hus*, *as*, 女性及び中性名詞では、*id*, *hud*, *ad* である。(Hahn: 1911, 23) ここでも注目すべき点は、語頭 *h-* を含む交替形が指示詞幹から派生される、場所を表わす副詞にみられることである。つまり、*isan/hisan*「ここ」, *asan/hasan*「あそこ」, *husan*「そこ」(これに対応する **usan* はない); *iyyā/hiyyā*「ここに」, *ayyā/hayyā*「あそこに」, *huiyya*「そこに」; *ittrā/hittrā*「こちら側に」, *attra/hattra*「あちら側」, *huttra*「そちら側に」(Bleses 1956)

Kuṛux と同じドラヴィダ語族に属する Malto は近称 *i*, 中称 *u*, 遠称 *a* の三体系である。これに加えて、派生語として *na*「あそこにいる人」がある。

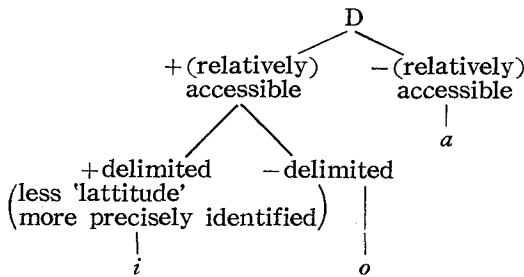
Zide (1972) は、Bodding (1929) のデータを使って、Santali の指示体系を分析し、次のように述べている。

'Santali has three demonstrative stems — O «this», i «that», and a «yonder» — indicating locations relative to the speaker's position. These three regions can be further divided into three on the same basis — by the use of the pre-demonstrative qualifiers n «near»: «zero» «unmarked»: and h «far», which provide specification of nine degrees of relative distance (P. 267)

つまり、近い方から遠い方へ、*no-* (又は *nu-*), *on-* (又は *un-*), *hon-* (又は

hun-), *ni-* (*ne-*), *in-* (*en-*), *hin* (*hen*), *na-*, *an-* (*ən-*), *han-* (*hən-*)⁽⁶⁾ の 9 体系をもつと解釈した。

しかし、後に、Zide (1985) は、この形態音素分析は正しいとしながらも、意味分析のまちがいを認め、以下のように再解釈している。接頭辞 (P) *n-*, *ϕ*, *h-* が基本的な近称、中称、遠称を決定すること、そして、指示詞幹 (D) である *o-, i-, a-* を次のように分析している。(P. 7)



Mundari の指示体系は、Hoffmann (1903, P. 9) をはじめ、Cook (1966, P. 179), N. K. Sinha (1975, P. 65) とも、近称 *ne*, 中称 *en*, 遠称 *han* の三体系をあげているが、上記の Santali の分析をふまえた上で、Munda (1979) は、Mundari の指示体系も、Santali と同様 9 体系であることを指摘した。(P. 16-17) すなわち、*i*, *e*, *a* が指示詞幹であり、それに接頭辞 *n-* <近>, *ϕ* <中>, *h-* <遠> がそれついた形で $3 \times 3 = 9$ 体系となる。

Deeney (1978) によると、Ho の体系は、近称 *ne*, 中称 *en*, 遠称 *han* の三体系であるが、Santali や Mundari と同様 $3 \times 3 = 9$ 体系である可能性が強い。詳しい調査をまたなくてはならないが、Deeney (1978) には、*nai* 'this one (same as *ni*)' *ne* 'this' *ni-* 'this one' がみられることからも、9 体系と言ってよからうと思われる。

(6) カッコの中の交替形は、母音調和による。後につづく母音が高母音の場合には、*i*, *u*, *ə* が、他の母音の場合には *e*, *o*, *a* が交替してあらわれる。また、指示詞幹 (*o*, *i*, *a*) とその接頭辞 (*n-*, *ϕ*, *h-*) に、Zide (1972) は分析しているが、接頭辞が *ϕ*, *h-* の時には、指示詞幹の後に *-n* がくる。

Kharia の指示体系は、近い方から遠い方へ *u*, *ho*, *han*, *hin* の四体系を示す。 (Biligiri: 1965, P. 65, Malhotra: 1982, P. 52), ただし、この四体系は指示代名詞としてのみあらわれ、指示形容詞の場合、*han* は場所を示す名詞と共に、*hin* は時間を表わす名詞とともにもちいられ、*han* と *hin* は相補分布をなす。例えば、*han paro-te* (*han*: 指示形容詞, *paro*「側」, *te*「に」) 「そちら側に」, *hin bhere* (*hin*: 指示形容詞, *bhere*「時」) 「その時」, 時間や場所を表わす名詞以外では、近称 *u*, 遠称 *ho* の二体系である。*u solo?* (*u*: 指示形容詞, *solo?*「犬」) 「その犬」, *ho konseldu* (*ho*: 指示形容詞, *konseldu*「女」) 「その女」。 (Malhotra: 1982, P. 52-3) Biligiri (1965) によると *hin* は ‘invisible’ を指す (P. 65) とあるが、Malhotra (1982) はこれを否定し、*ho* や *han* も見えない対象物を指しうることを指摘している。(P. 53)

ここで、これまでみてきた指示詞幹を表にまとめてみよう。(次頁〔表3〕)

〔表3〕

INDO-ARYAN	近称	中称	遠称
Nagpuri (Nowrangji)	i		u
DRAVIDIAN			
Kurux (Emeneau)	i	hu	a
Malto (Emeneau)	i	u	a
MVNDA			
Santali (Bodding & Zide)	$\begin{cases} n \\ \phi \\ h \end{cases}$	$\begin{cases} o \\ - \end{cases}$	$\begin{cases} n \\ \phi \\ h \end{cases}$ i-
Mundari (Munda)	$\begin{cases} n \\ \phi \\ h \end{cases}$	i-	$\begin{cases} n \\ \phi \\ h \end{cases}$ e-
(Hoffmann, Cook, ne N. K. Sinha)		en	han
Ho (Deeney)	ne	en	han

Kharja (Malhotra)	u	ho {han} {hin}
-------------------	---	-------------------

なお, Santali, Mundari, Ho は Zide (1985) の表による. Zide も指摘しているように, これは形態音素分析にもとづく解釈であり, 実際意味論の立場から言えば, *n*-+D (指示詞幹, つまり, Santali の *o*-, *i*-, *a*-, Mundari の *i*-, *e*- *a*-) が近称を, ϕ +D が中称を, *h*-+D が遠称を指す.

歴史的解釈に入る前に, Zide が触れている sound symbolism について, 少しだけ述べておく. すなわち, 前舌高母音または前舌中母音が近称を, grave 母音が遠称をそれぞれ示すという普遍性が, Kharja の近称 *u*-, Santali の近称 ⁽⁷⁾ *o*- をのぞけば, 適応されるように見える. しかし, これ以上詳しいことは, ここでは述べない.

筆者の知る限り, 指示詞についての借用関係をはじめて取り上げたのは, de Vreeese (1968) である.

すでに注目すべき点としてあげた, *h*- を含んだ語形は, Nagpuri に隣接する Maithili (マイティリー) や Bhojpuri (ボジュブリ), そして Bengali や Oriya の方言等, Magadhan 諸語には広くみられる. 例えは, Maithili 南部方言, *hini*, *hinki*, *inhe inh^a*, *in^a* 'this, he, she' *huni*, *hunhi* 'that, he, she', Bhojpuri, *hinki*, *inhi* 'this, he, she' *hunhi*, *unhi* 'that, he, she' Bengali Backergunge 方言 *hini* 'he, she' Oriya Bhatri 方言 (マディヤ=プラデシュ州バスタル県の北東部) *hun*, *hay* 'he, she' (de Vreeese 1968, pp. 359-60)

これら *h*- を含む語形については, de Vreeese (1968) は, Jha (1958), Tiwari

(7) Zide (1985) は, Zide (1972) の意味解釈のまちがいを認め *o* を [+relatively accessible] [-delimited] と再解釈したので, 近称 *o*- が決してこの普遍性に反する例とは言えないと言っている (P. 3).

(8) Chatterji (1926) の分類・名称によった. Encyclopaedia Britanica で Cardona が試みた分類では, Assamese, Bengali, Oriya を Eastern Group また, Maithili, Bhojpuri 等の Bihari は, Midland Group と Chatterji とは異なる.

(1960), Chatterji (1926) のインド=アーリア諸語自体の史的音韻変化による説明を簡単に紹介した後、詳細な検証によって、これらが ‘un-Aryan’ の語形から派生されたもので、インド=アーリア諸語に起源を求める必要はないようと思われると述べて、次のように結論づけている。

‘A comparison of the Mai(thili) pronouns of the type hini, ini/huni, uni with the above demonstratives (=ムンダ諸語の指示詞), the Munda origin of which is well established, sufficiently shows that we are concerned here with borrowings from Mundas’ (P. 360)

このいくぶん性急すぎるように思われる結論は、Emeneau (1980b)による、次のような反論をまねくことになる。すなわち、この語頭の *h-* がまったくインド=アーリア諸語になじみのないものではなく、現代インド=アーリア諸語の Sindhi や Marathi にみられる他、Bloch (1934) の研究にしたがって、すでに Aśoka 碑文にも次のような形がみられることを、Emeneau (1980b) は指摘している。(P. 22) *hevam* ‘thus’ (=*evam*) *hemeva* ‘just thus’ (< Skt. *evam eva*), *hida* ‘here’ (=Skt. *iha*, Pali and Aśoka *idha*), *hedisa-* ‘like this’ (=*edisa-*, Pali *edisa-*), *hesā* ‘this (fem.)’ (=*esa*, skt. *eṣā*). Bloch はこの *h-*について、‘expressiveness’ を強調するためとの説明を与えているが、Emeneau (1980b) は、‘Presumably this is where the Magadhan forms collected by De Vreeese should be classed’ (P. 22) と、de Vreeese のムンダ諸語からの借用説に疑問を投げかけている。

Emeneau (1980b) は、Magadhan 諸語の指示詞が、Munda 諸語からの借用語であることに、かなりの留保を示しているのに対して、Dravida 諸語の Kuṛux の語頭の *h-*、そして、Malto の *na*については、Munda 諸語からの借用であろうと推測している。

まず、Kuṛux について、Emeneau (1980b) は、Kuṛux と Mundari は接触しており、Kuṛux の中称 *hu-* は他のドラヴィダ諸語と比べて特異なものであり、Santali-Mundari の *hu-/ho-* からの借用であるかもしれないと述べて

いる (P. 23). しかし, Kuwi (小論では問題としない) の *he-*, *hu-* を考察した結果, これらについて, *hu/ho* からの借用ではなく, ‘We might think of borrowing of merely initial *h*- as a marker of the more remote’ (P. 24) と結論づけている。

一方, Malto の指示詞は, 近称 *i*, 中称 *u*, 遠称 *a* で, Old Tamil や Kannada と同一の語形と体系をもち, Dravidian 個有のものと思われる。それに加えて, *na* ‘that one [remote] who is present’ がみられるが (Emeneau 1980b, P. 26), これは Santali の *na*- ‘near within the remote zone’ と関連があり, ‘The whole morph is undoubtedly a borrowing from Santali into Malto (the languages are contiguous)’ (P. 26) と Emeneau (1980b) は断定している。

さて, Indo-Aryan の *h*- や Kurux の *h*- の起源とされたムンダ諸語について, ムンダ研究者はどうみているのだろうか。

Pinnow (1965) は, de Vreeese や Emeneau の指摘以前に, オーストロ=アジア諸語の比較から, Proto-Austro-asiatic demonstrative として, 14 *ha-*hi/he-*hu/ho をあげている (P. 33). 後に述べるように, Zide (1985) は, 語頭の *h*- が Proto-Munda にはみられないことを指摘しているし, 地域特徴をあまり考慮に入れない Pinnow の研究は, 吟味する必要がある。

では, Pinnow の後, 南ムンダ諸語の研究成果を取り入れ, 地域特徴についても配慮されている Zide (1985) は, de Vreeese や Emeneau の説をどうみているのだろうか。

Zide (1985) は, まず de Vreeese の説については, ‘There may be borrowings from IA into Munda, but I don’t know of any’ (P. 10) と, 否定的ながらも, 結論を出すのを避けている。

そして, 問題の *h*- については, Proto-Munda には **h* は再構されないし, Santali や Mundari の *h*- は Proto North Munda の **k* にさかのぼること, *h*- の内的起源 (internal sources) として Korku や Kharia にみられ

るよう，‘laryngeal vowels’ から変化したものがあるが，Santali や Mundari の *h-* はこの例にはあてはまらないこと，の 2 点をあげて，次のように結論づけている。

‘I suggest that ‘expressive *h*’ was borrowed (perhaps independently in several of the NM (=North Munda) languages), and then phonologized and morphologized. —中略— I do not see ‘expressive *h*’ — restricted, as in Gutoob, or generalised as in Kherwarian — as an old Munda feature. Certainly it was a widespread areal feature, and available for the borrowing by various Munda languages.’ (P. 10)

以上，安易な借用関係を想定することは可能であるが，ここでは，それぞれの専門家の説を紹介するにとどめておく。ここで言えることは，その起源についてはいろんな説があるまでも，チョターナーグプル地方の諸言語には，指示詞幹の中に，語頭の *h-* を含む語形が共通にみられる，ということである。上述の Zide の指摘からもわかるように，これは明らかに，かなり広範囲にみられる地域特徴である。

(5) 存在を表わす copula と身分・属性を表わす copula の区別

さて，最後にあげた地域特徴は，これまであまり詳しく論議されてこなかつた，存在を表わす copula (existential copula) と身分・属性を表わす copula (identity copula) の区別である。すでに，Munda (1983) が，‘concepts to be someone and to be somewhere are differently expressed in all the Jharkhand languages’ (EPW. P. 1092) と指摘しているが，詳細については述べてはいない。

また，Lakshmi Bai (1986) が，インドの地域特徴として，The verb “to be” が existential verb と equational verb の二つに形式的に区別されること，を指摘している。しかし，彼女のデータ処理がきわめてずさんであるこ

(9) と、現在形の肯定、否定だけを問題とし、未来形や過去形については論議されていないこと、ムンダ諸語がどの現代インド=アーリア諸語と隣接しているのか把握されていないし、その誤った地理感覚で、安易に借用関係を断定していること等、あまりにも多くの誤りを含んでいるため、はっきり言って使いものにはならず、筆者の検証が初めてのものと言ってよからう。

まず最初に、Mundari からみていこう。

Mundari には、存在を表わす copula *mena?* 一つまり、主語の空間における位置や場所を示すと、身分や属性を示す copula *tan* — 主語のアイデンティティを指す一の二つの copula がある。

(1) Soma ora?-re *mena?*-i-a
「人名」 「家」 「に」 3人称 Predictor
単数 (=Prd)
「ソマは家にいる」

(2) Soma *tan-i?*
3人称
単数
「(彼は)ソマです」

tan は、さらに進行相を示す *ta* と主語フォーカス=マークー *n* に分析できるように思われる。次の文と(2)をくらべよ。

(9) 例えば、Mundari のデータを Langendoen (1967) から引用しているのだが、読み込みが足らないために、(25) *ne ba salukid ta-n-a-q* 'This flower is a lotus' (P. 84) にみられる、identity copula *ta-n*、そしてその否定、(47) *ne ba salukid ka ta-n-a-q* 'This flower is not a lotus' (P. 88) にみられる *ka tan* については全く触れておらず、Mundari には *menaq* という copula だけがあり、否定形も *ban* だけであると解釈している (Lakshmi Bai P. 204)。また、このムンダ諸語のデータには、ミスプリントか、引用まちがいか、わからぬが、誤りが多すぎる。P. 204 1. 12 誤 *nalege* → 正 *na lage*, 1. 18 *apun* → *apum*, 1. 23 *menak?* → *menak'* 又は *mena?* 1. 27. *banuk* → *banuk'*, 1. 36 *hodo* → *hodo* 1. 36 *maran* → *maran*。たった1頁に少なくとも六つの引用文のまちがいがあることや、ERRATA には訂正されていないことから、ミスプリントではなく、Lakshmi Bai のまちがいであろう。

(10) (9)でみた解釈ミスに基づいて、Mundari に *ban* と *ka* の区別（実際にはもちろんある）がなくなったのは、多分 Hindi の影響によるものであろう (P. 205) と述べているが、Mundari と Hindi は教育現場以外では接触はあまりなく、Mundari と混在する IA (Nagpuri) には、小論でみるように、この区別（すなわち identity copula の否定形と existential copula の否定形の区別）がみられる。

また、Kurux についても、我々がみるように existential copula と identity copula の区別があるにもかかわらず、ないと断定した上で Hindi の影響によって失なわれたものだ (P. 206) ともっともらしく結論づけている。このように、まちがいや論点のおかしい点を指摘すると、枚挙にいとまがない。

- (3) Soma ora[?]-re-e[?] jom-ta-n-a
3人称「食べる」 Prd
単数

「ソマは家で食べている」

二つの copula (*mena[?], tan*) とも欠如動詞 (defective verb) で、現在時制にのみあらわれ、過去時制、未来時制では *tai* という形であらわれ、存在を表わす copula と身分・属性をあらわす copula の区別はなくなる。

- (4) Soma ora[?]-re tai-ke -n-a 「ソマは家に居た」
過去 主語 Prd
フォーカス

- (5) Soma tai-ke -n-a
過去 主語 Prd
フォーカス

「(彼は)ソマでした」もしくは「ソマは居た」

- (6) Soma tai-n-a-e[?]
主語 Prd 3人称単数
フォーカス
「ソマでしょう」もしくは「ソマは居るでしょう」

- (7) Soma ora[?]-re tai-n-a-e[?]
主語 Prd 3人称単数
フォーカス
「ソマは家に居るでしょう」

ところで、未来時制の次のような文章では *tai* の変りに *bai-o?* 「～なる」 (*bai* 「作る」, *o?*: Potential passive marker) が用いられる。つまり、(9')の方が (9) よりもずっと自然な文章である。なお、*bai* は、削除されることもある。

- (8) Soma najom tan-i[?]
「妖術師」
「ソマは妖術師です」

- (9) Soma najom tai-n-a-e[?]
「ソマは妖術師（になる）でしょう」

- (9') Soma najom bai-o[?]-a-e[?]
「ソマは妖術師になるでしょう」

- (9'') Soma najom φ-o[?]-a-e[?]
「ソマは妖術師になるでしょう」

次に、否定文についてみてみよう。*mena[?]* の否定形には、三つの交替形がある。

- (1') Soma ora[?]-re banja[?]-i-a
「ソマは家にいない」
- (10) Parkom ora[?]-re bano[?]-a
「ベッド」
「ベッドは家にない」
- (11) hon-ko ora[?]-re banj-ko-a
「子」複接辞 複接
「子供たちは家にいない」

この交替形について、Munda (1971) は、次のようにまとめている。 *bano*[?] [-animate] *ban* [+animate, -I·III Sg] *bangai*[?] [+animate, +I·III Sg]
(P. 47, 筆者が修正を加えた)

一方、*tan* の否定形は、他の規則動詞と同様に、動詞の前に否定を表わす形態素 *ka* を插入すればよい。また *tai* の否定形も同様である。

- (2') Soma ka tan-i?
「(彼は)ソマではない」
- (5') Soma ka tai-ke-n-a-e? もしくは、Soma ka-e? tai-ke-n-a
「(彼は)ソマではなかった」または、「ソマは居なかった」
- (6') Soma ka tai-n-a-e? もしくは、Soma ka-e? tai-n-a
「ソマではないでしょう」又は「ソマはいないでしょう」

Ho の体系は、Muñđari と全く同じで、唯一の相異は Muñđari の *tai* の変りに *tai* が用いられることである。

Santali も、Muñđari とほとんど同じであるが、語形が少し異なる。 Santali の *menak'* (existential copula), *kan* (identity copula また Progressive aspect marker としても用いられる) *tahēkan* (*tahē* 'to stay') *ban* (negative marker) がそれぞれ Muñđari の *mena?*, *tan*, *taiken*, *ka* に対応する。*menak'* の否定形は、*bənuk'* で Muñđari や Ho のように交替形はない。未来時制では、existential copula にも identity copula にも *hoyok'* 'to become' が用いられる。

上にみてきた Kherwarian (Santali, Muñđari Ho etc) 諸語と違って、南ムンダ諸語に属する Kharția では、存在を表わす copula と身分・属性を表

わす copula の区別はみられるものの Kherwarian との対応語形はなく、隣接するインド=アーリア諸語の Nagpuri からの借用語形がみられる。

Khařia の存在を表わす copula は、*aij* (Indo-Aryan [=IA] からの借用語) で、*aij* は助動詞としても用いられる。一方、身分・属性を表わす copula は *heke* (IAからの借用語) である。どちらの copula も Muñđari と同様、現在形だけがみられる欠如動詞で、過去形、未来形は、どちらの copula も *au-na* 'to live' に融合される。*aij* と *heke* は、それぞれ補充法として、*umborij*, *na lage* (IAからの借用語) の否定形をもつ。Biligiri (1965)によると、三人称以外では、*na lage* は用いられず、一般動詞と同様、否定形の *um* を *heke* の前に添えて否定を表わす。例えば、*um-iñ heke* (*iñ* : 1人称単数)
(11) 「私ではない」(P. 96)

- | | |
|--|----------------------|
| (12) Soma o?-te <i>aij</i>
「家」「に」 | 「ソマは家に居る」 |
| (13) ukar̥ Soma <i>heke</i>
「彼は」 | 「彼はソマです」 |
| (14) Soma o?-te <i>au-ki</i>
過去 | 「ソマは家にいた」 |
| (15) ukar̥ Soma <i>au-ki</i> | 「彼はソマでした」 |
| (16) Soma o?-te <i>au-na</i>
未来 | 「ソマは家に居るでしょう」 |
| (17) Soma ukṛ-a? <i>agua au-na</i>
所有「リーダー」 | 「ソマはこの人のリーダーになるでしょう」 |
| (12') Soma o?-te <i>umborij</i> | 「ソマは家に居ない」 |
| (13') ukar̥ Soma <i>na lage</i> | 「彼はソマではない」 |
| (14') Soma o?-te <i>um au-ki</i> | 「ソマは家に居なかった」 |

ムンダ諸語の次には、インド=アーリア諸語についてみてみよう。小論では Nagpuri だけをとりあげた。

Nagpuri の体系とムンダ諸語である Khařia の体系は、面白いことに、と

(11) Khařia の例文については、筆者の所属する、ラーンチー大学部族・地域言語学部の Rose Kerketta 先生に、チェックして頂いた。

てもよく似ている。現在時制では、*ah-* と *hek-* が、それぞれ存在を表わす copula、身分や属性を表わす copula であり、過去時制では *rah-*、未来時制では *ho-* にそれぞれ融合される。ただし未来時制では、存在を表わす copula として、*rah-* も用いられる。*ah-* と *hek-* の否定形は、それぞれ *nakh-* と *na*
(12)
lag- である。

- | | |
|---|-----------------|
| (18) Somā ghar-e <i>ah-e</i> | 「ソマは家に居る」 |
| 「家」「に」 | 3人称单 |
| (19) u Somā <i>hek-e</i> | 「彼はソマです」 |
| 「彼は」 | |
| (20) Soma ghar-e <i>rah-l-e</i> | 「ソマは家に居た」 |
| 過去 | |
| (21) u Soma <i>rah-l-e</i> | 「彼はソマでした」 |
| (22) Somā ghar-e <i>ho-b-i</i> / <i>rah-i</i> | 「ソマは家に居るでしょう」 |
| 未来 | 3人称
单 |
| (23) u cāsi <i>ho-b-i</i> | 「彼は農夫（になる）でしょう」 |
| 「農夫」 | |
| (18') Somā ghar-e <i>nakh-e</i> | 「ソマは家に居ない」 |
| (19') u Somā <i>na lag-e</i> | 「彼はソマではない」 |
| (20') Somā ghar-e <i>ni rah-l-e</i> | 「ソマは家に居なかつた」 |
| 否定 | |

[表記について] ā=/a/, a=/ʌ/ Nagpuri では、母音の長短の対立がない。
 (Jordan ·Horstmann 1968)

(21)～(23)の否定文は(20)の否定文(20')を作る時と同様、否定を表わす形態素 *ni* を copula の前に置けば良い。

なお、*ah-* には助動詞の用法もあるが、*hek-* には他の用法はみられない。例えば、*u Ranchi ja-t ah-e* (*Ranch*: 地名, *ja* 「行く」, *-t* : 現在未完了, *ah-* : 助動詞, *e* : 三人称单数) 「私はラーンチーへ行くところです」。これは、身分・属性の示す、*Mundari*, *Ho tan*, *Santali kan* が、進行相 (Progressive Aspect

(12) Nagpuri の例文については、ラーンチー大学部族・地域言語学部の B. P. Kesari 先生にみて頂いた。

Marker) と関連していること、また、*Kharia* の存在を表わす *aij* が助動詞としても機能を果すこと、等と比較すれば、重要な意味をもってくるかもしれない。

ドラヴィダ諸語の *Kuřux* の場合、少し事情は変ってくる。存在を表わす copula は *ra'anā* で IA からの借用語である。身分や属性を表わす copula は、*hiknā* と *talnā* (方言によっては *taılñā*) の二形があり、自由変異をなす。*hiknā*, *talnā* は、*Munđa* や IA のように欠如動詞であるが、*ra'anā* はそうではない。つまり、過去時制と未来時制では、これらの copula は *ra'anā* に中和される。*ra'anā* は Nagpuri の *āh-* と同様、助動詞の用法もみられる。否定形は、*malnā* (方言によっては *mailnā*) で、二つの交替形——つまり *malkan* (存在を表わす copula), *maldan* (身分・属性の表わす copula) ——がみられる。それに加えて、一般動詞のように、単に *māl* を copula の前に置くことによっても、否定文を作ることができる。⁽¹³⁾

- | | |
|---|---------------|
| (24) Soma erpā -nū <i>ra'adas</i>
「家」 「に」 3人称・单・男・現在 | 「ソマは家に居る」 |
| (25) ās Soma <i>hikdas</i> / <i>taldas</i>
「彼は」 3人称・单・男・現在 | 「彼はソマです」 |
| (26) Soma erpā-nū <i>ra'acas</i>
3人称・单・男・過去 | 「ソマは家に居た」 |
| (27) ās Soma <i>ra'acas</i> | 「彼はソマでした」 |
| (28) Soma erpā-nū <i>ra'aos</i>
3・单・男・未来 | 「ソマは家に居るでしょう」 |
| (29) ās guru <i>ra'aos</i> / <i>manos</i>
「先生」 「～なる」 | 「彼は先生になるでしょう」 |
| (24') Soma erpā-nū <i>malkas/māl ra'adas</i> | 「ソマは家にいない」 |
| (25') ās Soma <i>maldas/māl hikdas/māl taldas</i> | 「彼はソマではない」 |
| (26') Soma erpā-nū <i>māl ra'acas</i> | 「ソマは家に居なかった」 |
- なお、(27)～(29)の否定文は(26')のように *māl* を動詞の前に挿入すればよ

(13) *Kuřux* の例文については、ラーンチー大学部族・地域言語学部の Indrajit Oraon 先生及び Xavier Institute of Social Studies の Alex Ekka 神父にチェックして頂いた。

い。

以上、チョターナーグプル地方の諸言語の copula について、詳しくみてきたが、わかりやすくするために、表にまとめて [Appendix] として P. 167～169 に載せた。

そこで、その表を見ながら、この区別の史的問題について、すこし考察してみたい。

Indo-Aryan と Munda の体系はよく似ており、Kuṛux については、あまり精練された体系ではない。すなわち、チョターナーグプル地方に関してのみ考えるならば、Dravidian が、この体系の起源とみるのはむずかしいようと思われる。

ムンダ諸語について、Pinnow (1966) は *mena ‘to be’ が ‘can be conjectually posited for Proto-Munda’ (P. 177) と指摘しているが、その可能性はどうも少ないようと思われる。確かに、Santali, Mundari, Ho 等を含む Kherwarian 諸語においては、存在を表わす copula として mena? が全ての言語にみられる。しかし、Kherwarian と同じ北ムンダ諸語をなす Korkuでは、この mena? の対応語がないばかりか、存在を表わす copula と身分・属性を表わす copula の区別もない (Zide: 1988 personal communication)。一方、Kharia と Juang からなる中央ムンダ諸語では、Pinnow (1968) が Juang に /mena/ ‘sein’ がみられることを報告している (P. 377) が、Juang を詳しく述べた Matson は、その Juang English list (Matson: 1964, pp. 65-77) に /mena/ を掲載していない。また、小論ですでにみた Kharia では、copula は全てインド=アーリア諸語からの借用語である。

さらに、南ムンダ諸語にはこの mena? の対応語は見当たらない。

Zide (1980, personal communication) によると Korku は南ムンダ諸語と同様、場所の copula をもつ。Korku *ta᷍kha* (多分 Mundari *tai* Santali *tahē* 等と起源を同じくすると思われる) 南ムンダ諸語の多くは、Korku と同様、copula of identify として zero copula を、existential copula とし

て, *dV_k(V)-(Gutob duk-/dik- Sora dəku)* をそれぞれもつが, この *dV_k(V)* は, Korku *doð* ‘to put, place’ Sautali *dəho* ‘to place, put’ Mundari ⁽¹⁴⁾ *doho/do* ‘to place, put down’ と起源を同じくするムンダ諸語である。

ドラヴィダ諸語とムンダ諸語についてみてきたが, ではインド=アーリア諸語についてはどうだろうか。

Nagpuri の *ah-* は Old Indo-Aryan *as* ‘to be’ にさかのぼることができる (Jordan Horstmann 1968: 77). また, Nagpuri と同様の体系が Bengali をはじめ, Oriya, Assamese 等, Magadhan 諸語にみられる。例えは, Bengali では, *o Soma hoy* (*o* 「彼は」) 「彼はソマです」, *Soma ghor-e ache* (*ghor* 「家」 *e* 「に」) 「ソマは家に居る」これらの否定文は, *o Soma nøy* 「彼はソマではない」, *Soma ghor-e nei* 「彼は家に居ない」。また, 過去時制では, *o Soma chilo* 「彼はソマでした」, *Soma ghor-e chilo* 「ソマは家に居た」と二つの copula の区別はなくなる。

小論の目的は, チョターナーグプル地方の地域特徴の共時的記述にある。この体系がインド=アーリア起源であると結論づけるためには, 証明に必要な全ての当該言語——つまり, インド=ヨーロッパ語からモン=クメール語に至る——をみなければならない。それは, 今後の課題としておく。

III. 結論

チョターナーグプル地方は, 三大語族がお互いに影響しあう, インドでも珍しい地域である。チョターナーグプル地方に拡がる全ての共同体は, 長い間にわたって, 社会的にも, 文化的にも相互に影響しあってきた。こうした環境のもとで, 言葉自体もお互いに干渉しあって, もともと違った言語グループに属

(14) (2)でみたように, Ho, Mundari では, 音韻論的解釈による单一開音節形態素は, ニモーラで実現される。*/do/=[doo]*

(15) Oriya, Assamese の例が, Lakshmi Bai (1986. P. 200) によって, 取り上げられているが, ムンダ諸語のデータ処理のすさんさをみると, 詳しく吟味する必要があろう。

(16) Bengali のデータについては, Sanjay Basu Mullick 氏に例文を作って頂いた。それぞれのインフォーマントを務めて下さった方に心から感謝の意を表わしたい。

する諸言語が、共通の言語特徴をもつにいたった。小論では、これら、いくつかの地域特徴の記述を試みた。

Emeneau がすでに示したワク組みに沿った形で、議論を進めてきたが、次のような特徴が、チヨターナーグブル地方の諸言語に共通してみられる。

(1) Echo Word Formation

(2) Onomatopoetics

(3) 類別詞

(4) 指示詞幹(特に遠称を示す語頭の h-)

(5) existential copulaとidentity copula の区別

(5)に関しては、今後の研究課題として、もう少しデータ分析を行なう必要があろう。

将来、ムンダ語源辞典 (Mnnda Etymological Dictionary) が完成されたあかつきには、この地域研究は飛躍的に進歩をとげるはずである。そして、我々は、その完成の日まで、日夜、努力を続けるであろう。

[APPENDIX]

The copula systems in the laguages in Chotanagpur

(A) Munda language group

(i) Mundari (Munda, 1971)

	existential	identity
Present	mena?	tan
Past		taiken
Future		tain?
Negative Present	bano?/banj/ bangai?	ka tan
Neg. Past		ka taiken
Neg. Future		ka tain
		ka baio?

(ii) Santali (Bodding 1929)

Present	menak'	kan
Past		tah̄kan
Future		hoyok'
Neg. Present	bənuk'	baŋ kan
Neg. Past		baŋ tah̄kan
Neg. Future		baŋ hoyok'

(iii) Ho (Deeney 1975)

Present	mena?	tan
Past		taiken
Future		tain
Neg. Present	bano?/baŋ/ baŋgai?	ka tan
Neg. Past		ka taiken
Neg. Future		ka tain
		ka hoba

(iv) Kharia (Biligiri 1965, Malhotra 1982)

Present	aij	heke
Past		auki
Future		auna
Negative Present	umborij	na lage/ um heke
Neg. Past		um auki
Neg. Future		um auna

(B) Indo-Aryan language group

(1) Nagpuri (Jordan-Horstmann 1968, Nowrangi 1956)

Present	ah-	hek-
Past		rahl-
Future	rahb-	hob-

Neg. Present	nakh-	na lag-
Neg. Past		ni rahl-
Neg. Future	ni rahb-	ni hob-
(c) Dravidian language group		
(1) Ku ^{rx} (Hahn 1911)		
Present	ra'adas	hikdas/taldas
Past		ra'ackas
Future		ra'aos manos 'become'
Neg. Present	malkan/māl	ra'adas maldas/māl hikdas/māl taldas
Neg. Past		māl ra'ackas
Neg. Future		māl ra'aos māl manos

[Bibliography]

- Abbi, A. (1980) *Semantic Grammar of Hindi: A Study in Reduplication*. New Delhi: Bahri Publications.

Annamalai, E. (1968) Onomatopoeic resistance to sound change in Dravidian. in *Studies in Indian Linguistics: M. B. Emeneau ṣaṭipūrti volume*. pp. 15 -19. Poona and Annamalainagar.

Apte, M. L. (1968) *Reduplication, Echo Formation and Onomatopoesia in Marathi* Poona Deccan College.

Bhaduri (1931) *A Mundari-English Dictionay*. Calcutta University Press.

Bhaskararao, P. (1977) *Reduplication and Onomatopoeia in Telugu*. Poona: Deccan College.

Biligiri, H. S. (1965) *Kharia: Phonology, Grammar and Vocabulary*. Poona : Deccan College

Blain, E. (1975) *English-Sadri Dictionary*. Jharsuguda : The Society of the Divine Word.

Bleses, C. (ed) (1956) *An English-Uraon Dictionary*. Ranchi : Dharmik Sahitya Samiti.

Bloch, J. (1934) L'Indo-aryen du Veda aux temps modernes. Revised and translated by A. Master, *Indo-Aryan from the Veda to modern times*. Paris, 1965.

- Bodding, P. O. (1929) *Materials for a Santali Grammar II*. Dumka : The Santal Missoni of the Northern Church.
- (1932-36) *A Santali Dictionary*. Vols, I~V. Oslo : Det Norske Videnskaps Akademi.
- Burrow, T. & M. B. Emeneau (1961) *A Dravidian Etymological Dictionary (DED)*. Oxford : Clarendon Press.
- (1962) *Dravidian Borrowings from Indo-Aryan*. Berkeley : University of California Press.
- (1968) *A Dravidian Etymological Dictionary: Supplement (DEDS)*. Oxford : Clarendon Press.
- (1972) Dravidian Etymological Notes. *JAOS* 92. pp. 397-418, 475-91.
- Chatterji, S. K. (1926) *The Origin and the Development of the Bengali Language (ODBL)* London : George Allen & Unwin. (1970 Reprint Edition)
- Cook, W. A. (1966) *A Descriptive Analysis of Mundari: A study of the Structure of the Mundari Language According to the Methods of Linguistic Science*, unpublished Georgetown University Ph. D Dissertation.
- Deeney, J. (1975) *Ho Grammar and Vocabulary*. Chaibasa : Xavier Ho Publication.
- (1978) *Ho-English Dictionary*. Chaibasa : Xavier Ho Publication.
- de Vreese, K. (1968) Munda Pronouns in New Indo-Aryan. in *Pratidanam* pp. 59-61. The Hague : Mouton.
- Diffloth, G. (1976) Expressives in Semai. in *Austroasiatic Studies* edited by P. N. Jenner, L. C. Thompson & S. Starosta. pp. 249-64. Hawaii : University Press of Hawaii.
- Dimock, E. (1957) Symbolic Forms in Bengali. *Bulletin of the Deccan College Research Institute*. Vol. 18. pp. 22-29.
- Emeneau, M. B. (1938) Echo-words in Toda. *New Indian Antiquary* 1. pp. 109-17.
- (1956) India as a linguistic area. *Language* 32. pp. 3-16. [Emeneau (1980a) pp. 105-25]
- (1965) India and linguistic area. in *India and Historical Grammar*. pp. 25-75. [Emeneau (1980a) pp. 126-66]
- (1969) Onomatopoeitics in the Indian linguistic area. *Language* 45. pp. 274-99. [Emeneau (1980a) pp. 250-93]
- (1980a) *Language and Linguistic Area*. Essays by M. B. Emeneau. Stanford University Press.
- (1980b) Indian demonstrative pronominal bases : A revision. *Proceedings*

- of the Six Annual Meeting of Berkeley Linguistic Society.*
pp. 20-27.
- (1983) Demonstrative Pronominal Bases in the Indian Lingnistic Area.
IJDL vol XII No. 1. pp. 1-7.
- Hahn, F. (1911) *Kurukh Grammar*. Calcutta.
- Hoffmann, J. (1903) *Mundari Grammar*. Calcutta : Bengal Secretariat Press.
- (1929-50) *Encyclopaedia Mundarica*. Vols I~XIII Patna : Government Press.
- Hoffmann, K. (1952) Wiederholenden Onomatopoetika in Altindischen. *Indogermanische Forschungen* 60. pp. 254-64.
- Jha, S. (1958) *The Formation of the Maithili Language*. London.
- Jordan-Horstmann, M. (1968) *Sadani: A Bhojpuri Dialect Spoken in Chota Nagpur*. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- (1974) Echo- und Reimwortbildungen in der oralen Sadani-Literatur (Chotanagpur/Indien). *Anthropos* 69. pp. 232-249.
- Krishnamurti, Bh. (ed) (1986) *South Asian Languages: Structure, Convergence and Diglossia*. Delhi : Motilal Banarsi das.
- Kuiper, F. B. J. (1965) Consonant variation in Munda. *Lingua* 14. pp. 54-87.
- Lakshmi Bai, B. (1986) A note on syntactic convergence among Indian languages : The verb "to be". in *Krishnamurti* (ed). pp. 195-208.
- Langendoen, D. T. (1967) The copula in Mundari. *Foundations of Language. Supplement #1*. pp. 75-100.
- Mahapatra, K. (1976) Echo-formation in Gta ? in *Austroasiatic Studies* edited by P. N. Jenner et al. pp. 815-31. Hawaii : University Press of Hawaii.
- (1986) Desia : A Tribal Oriya Dialect of Koraput Orissa. *Adibasi* Vol. XXV Nos. 1-4.
- Malhotra, V. (1982) *The Structure of Kharia: A Study of Linguistic Typology and Language Change*. unpublished Jawaharlal Nehru University Ph. D. Dissertation.
- Masica, C. P. (1976) *Defining a Linguistic Area: South Asia*. Chicago : University of Chicago Press.
- Matson, D. M. (1964) *A Grammatical Sketch of Juang: A Munda Language*. unpublished University of Wisconsin Ph. D. Dissertation.
- Morin, Y. C. (1972) The phonology of echo-words in French. *Language* 48. pp. 97-108.
- Munda, R. D. (1971) Aspects of Mundari Verb. *Indian Linguistics* 32. pp. 27-49.
- (1979) *Mundāri-Vyākaran*. Ranchi : Mundāri Sāhitya Parisad.

- (1983) Jharkhand : A unique meeting place of linguistic and literary tradition. paper read at the International Conference on The Search of Unity in Diversity : A Crisis of Identity in Jharkhand. report appeared in *Economic and Political Weekly*. Vol. XVIII No. 25. pp. 1091-92.
- Nowrangi, P. S. (1956) *A Simple Sadani Grammar*. Ranchi : The D. S. S. Book Depot.
- Pinnow, H-J. (1959) *Versuch einer historischen Lautlehre der Kharia-Sprache*. Wiesbaden : Otto Harrassowitz.
- (1965) Personal Pronouns in the Austroasiatic languages : A historical Study. *Lingua* 14. pp. 3-42.
- (1966) A comparative study of the verb in the Munda languages. in *Studies in Comparative Austroasiatic Linguistics*. edited by N. H. Zide. pp. 96-193.
- (1968) Eine Mythe der Juang. in Pratidanam. pp. 371-80. The Hague : Mouton.
- Ramamurti, G. V. (1931) *A Manual of So : ra : Language*. Madras.
- (1933) *English-Sora Dictionary*. Madras.
- (1938) *Sora-English Dictionary*. Madras.
- Ramanujan, A. K. & C. P. Masica (1968) Toward a phonological typology of the Indian linguistic area. in *Current Trends in Linguistics* edited by T. Sebeok. Vol. V. pp. 543-577. The Hague : Mouton.
- Schapiro, M. C. & H. F. Schiffman (1981) *Language and Society in South Asia*. Delhi : Motilal Banarsi das.
- Singh, A. B. (1969) On echo-words in Hindi. *Indian Linguistics* 30. pp. 185-95.
- Sinha, N. K. (1975) *Mundari Grammar*. Mysore : Central Institute of Indian Languages.
- Tiwari, U. N. (1960) *The Origin and Development of Bhojpuri*. Calcutta : The Asiatic Society of Bengal.
- Turner, R. L. (1966) *A Comparativa Dictionary of the Indo-Aryan Languages (CDIAL)*. London : Oxford University Press.
- Vitebsky, P. (1978) *Sora "tag-words"*. paper presented in Second International Conference of Austroasiatic Linguistics. Mysore : Central Institute of Indian Languages.
- Zide, N. H. (1968) Munda and Non-Munda Austroasiatic Languages. in *Current Trends in Linguistics*. edited by T. Sebeok. Vol. V. pp. 411-30. The Hague : Mouton.
- (1972) A Munda Demonstrative System : Santali. in *Langues et Techniques*:

- Nature et Société* ed. by J. M. C. Thomas & L. Bernet. pp. 267-74.
Paris Éditions klincksieck.
- (1976) A note on Gta? echo-forms. in *Auatoasiatic Studies*. pp. 1335-43.
- (1985) *Munda Demonstrative Bases: North-Munda and Gutob-Remo-Gta?*.
Mimeo. Chicago.